第５章　宇部（常盤構内）工学部校舎新営に伴う試掘調査

１　調査の経過

調査地区は工学部キャンパスのほぼ中央部、工業化学科棟および機械工学科棟に囲まれた本館中庭に位置する（Fig.55, PL43(1)）。本地区への校舎新営に伴い、昭和59年１月23日から31日にかけて人文学部考古学研究室の協力を得て、旧地形の残存状況、土層の堆積状態並びに遺構、遺物の有無の確認を主眼として試掘調査を実施した。

本地区は工学部の前身である宇部工業専門学校当時、機械系教室の存在していた地域にあたり[1]、調査当初よりこれらの付随諸施設の埋存が予想された。しかるに、同キャンパスは周辺に点在する諸遺跡、とりわけ東方に所在する常盤池遺跡とは直線距離にしてわずかに300ｍを隔てる位置にあり、かつまた同一段丘（洪積世段丘の第Ⅲ段丘[2]）上に立地することから予定地内６ケ所にトレンチを設定して調査を行なった。（Fig. 56）。

調査は新営予定地約270㎡の

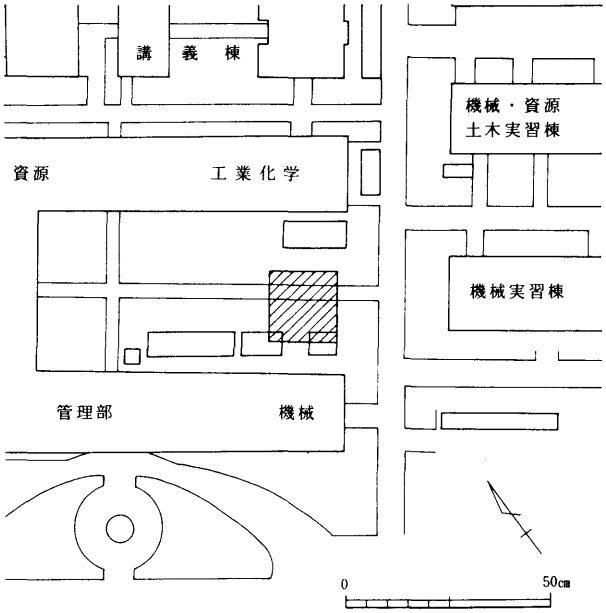


Fig.55　調査区位置図（１）

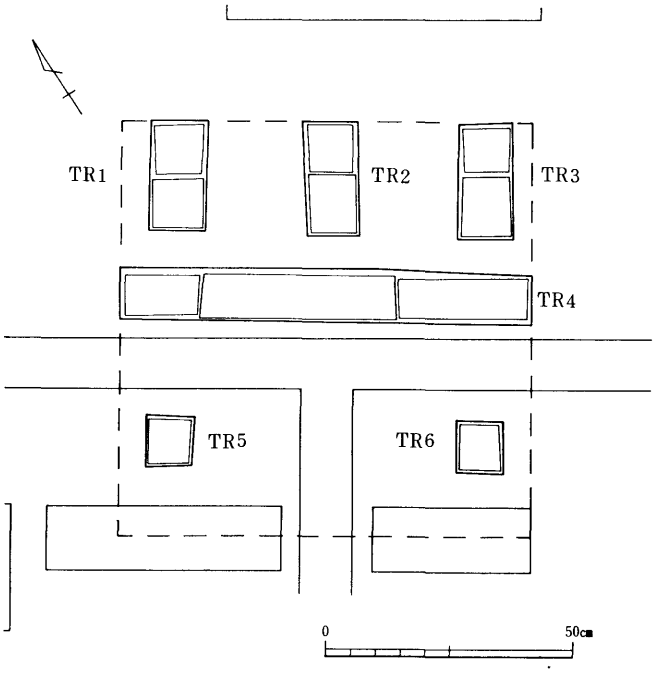


Fig.56　トレンチ設定図

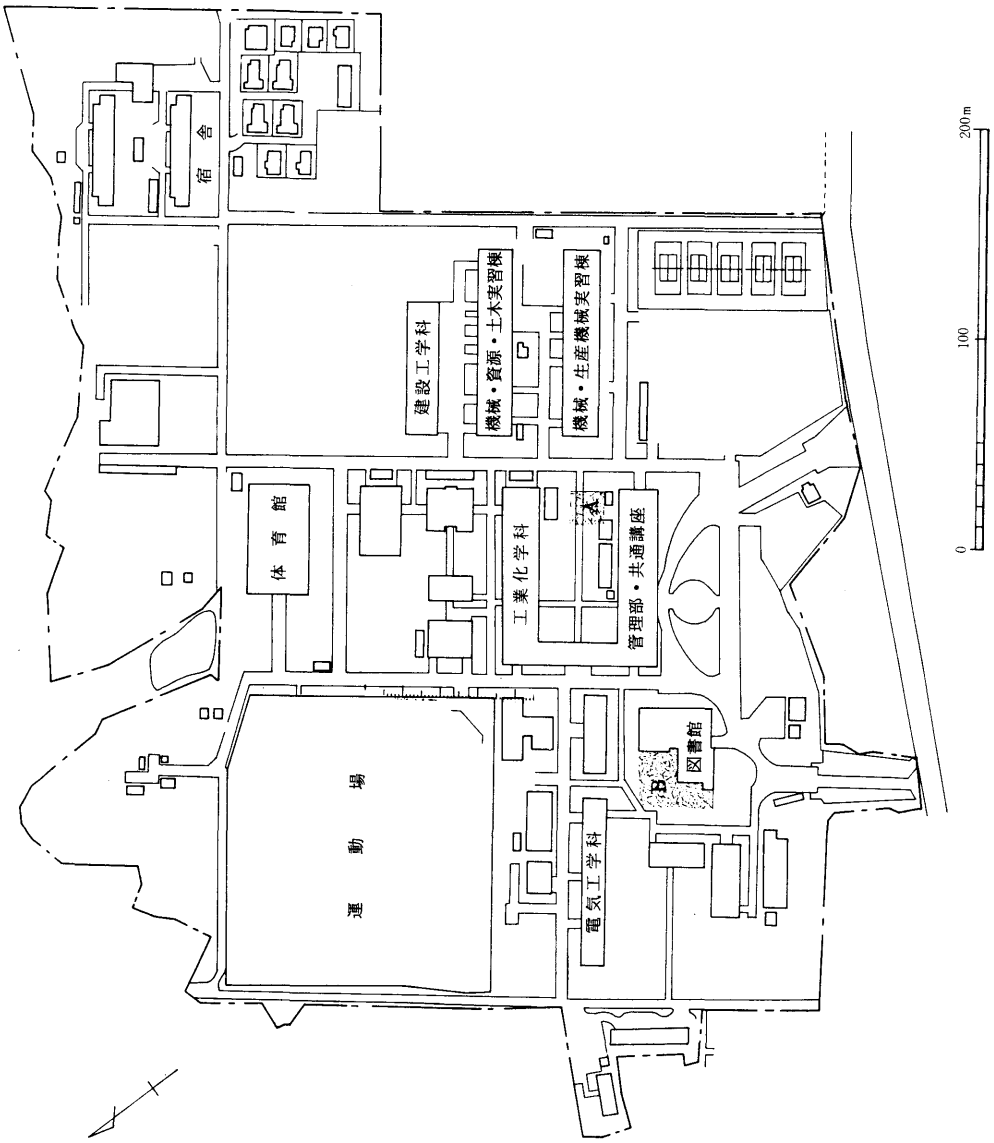


Fig.57　調査地（A－校舎・B－図書館）

うち約70㎡について既設構造物を回避しながら、北半部に2 m×4.5 mのトレンチを3カ所、中央部に2 m×16.5 mのトレンチ、南半部に2 m×2 mのトレンチを2カ所（北からTR1 ……TR 6と呼称する）設定して行なった。

表土は機械を使用して除去し、TR 1 ～TR 3 各北半部は第2層以下を掘削し土層の堆積状況を観察した。

その結果、調査区内は後世の削平が著しく、顕著な遺構・遺物は皆無であったが、TR 4表土中より須恵器片および磁器が出土した。

2　位置と環境

工学部キャンパスは本州の最西端山口県の南西部に位置する宇部市に所在し、市街地の北東約2 kmの低丘陵上に立地する（Fig.58）。

宇部市中・北部は雁子山、霜降岳等老年期山地の残丘が随所に存在するが、地勢の大部分は標高100 m前後の低丘陵（侵食平坦面）が発達し、県下第三位の河川、厚東川はこの低丘陵地帯を侵食しつつ南西に貫流する。西部地域厚東川河口の広汎な平野は、上流域に形成された小規模な谷底平野とは異なり、「開作」等の地名にみえるようにその大部分は毛利藩政以後（元禄以後）の干拓および延宝年間以後の石炭採掘[3]に伴う残土による埋立てによって形成されたものである。

一方、東部地域の沿岸部は基盤とする三群変成岩類、花崗岩等の火成岩類の侵食面に堆積した洪積層の数次にわたる隆起によって発達した海岸段丘を形成し、その前面に段丘を開析する侵食谷、海浜等には沖積層が堆積している。宇部市沿岸部を中心として広範囲に分布するこの洪積世段丘は宇部台地と呼ばれ、市域では高位、中位計4段の段丘面が確認されている。しかし、同一段丘面は一様な高度、平坦面を形成しておらず、市域西部、中部、東部三地域において各段丘ともそのあり方に相違がみられる。中位段丘のうち旧石器時代の遺跡が確認されている第Ⅲ段丘b面、第Ⅳ段丘を例にとると、前者は西部では標高15～30 mの持世寺面、中部では標高25～35 mの野中面、東部では標高25～30 mの古殿面、後者は中・西部では各々標高10～20 mの下岡面、亀浦面、東部では標高10～15 mの丸尾原面に対比され、地形的に同一段丘として標式的に把握されている[4]。

長桝遺跡、本郷遺跡、常盤池遺跡等東部地域に集中的に認められる後期旧石器時代の遺跡は、こうした侵食谷によって開析された中位段丘の台地縁辺部に立地する。遺物はすべて表採資料で前二者からはナイフ形石器、台形石器、掻器[5]、また、先に述べた如く工学部

キャンパス東方約300ｍに位置する常盤池遺跡からは剝片尖頭器、細石刃[6]がそれぞれ採集されている。

宇部市域における沖積低地は、わずかな扇状地を除いてその大部分が海進、海退による沖積段丘と海成砂堆地によって形成されており、縄文時代以後の遺跡立地、分布のあり方を規制している。

縄文時代の遺跡数は多くはなく、市部では砂堆上に立地する前期から晩期の月崎遺跡[7]（62）、雁ケ浜旧湾に発達した３列の浜堤列の最奥部に位置する花園遺跡（58）、中部では早期に遡りうる常盤池遺跡等が知られているにすぎない。

弥生時代の遺跡も同様で、北東部、中部、東部において散発的に認められる。北東部の厚東川中流域標高約40ｍの海岸段丘（第Ⅲの段丘）上に立地する諏訪の原遺跡（４）は中期後半の集落跡として把握される。中部では前期末の琴崎八幡宮馬場遺跡（19）、石包丁を伴出した中期後半の南側遺跡（20）、貝塚を伴う集落跡として著名な中期後半の北迫遺跡（14）等が知られている。東部では中須賀遺跡（60）、月崎遺跡(62)等海岸砂堆地に遺跡が認められる。月崎遺跡は中期から後期、中須賀遺跡は花園遺跡の前面、波雁ケ浜旧湾に発達した浜堤列の２列目に位置する後期後半から終末の遺跡で、中部に営まれた南側遺跡、北迫遺跡等の真締川上流域を中心とした狭隘な沖積地と樹枝状に入りくんだ小規模な谷頭平野に依存する中期の生産体制、基盤の脆弱さが東部に明示されるように後期における海岸沖積地への進出により発展段階的に解消されたものと理解される。

さらに、出土地点は明確ではないが、沖ノ山浜松の砂中から出土したといわれる甕形土器[7]を指摘することができる。極めて特異な形態、調整方法を有するこの甕は、内傾する胴上半部に続く口縁部外面には断面カマボコ状の扁平な粘土帯を貼りつける。また、胴上半部には叩きの痕跡が残り、ナデ消した後、刷毛目仕上げを行なっている。内部には半両銭20枚以上、五銖銭96枚以上を内蔵しており、朝鮮系無文土器の系譜を引く国産土器として中期後半から後期初頭に位置づけられている[8]。

古墳時代の遺跡には埋葬跡、生産跡、祭祀跡および遺物散布地が知られているが、住居跡等明確な集落跡は未検出である。前期の埋葬跡は海岸砂丘上に立地し、東部の大須賀遺跡（67）では箱式石棺10基、壺棺３基が検出されている。鏡が出土したというが判然としない。中期は明白な埋葬跡を欠き不明である。後期になると低丘陵上、海岸段丘上に小規模な古墳が営まれるようになる。東部の若宮古墳群（61）、月崎古墳群（63）や厚東川中流域の萱曲（かなまがり）古墳（１）、持世寺古墳群（５）等の横穴式石室を内部主体とする、円墳群

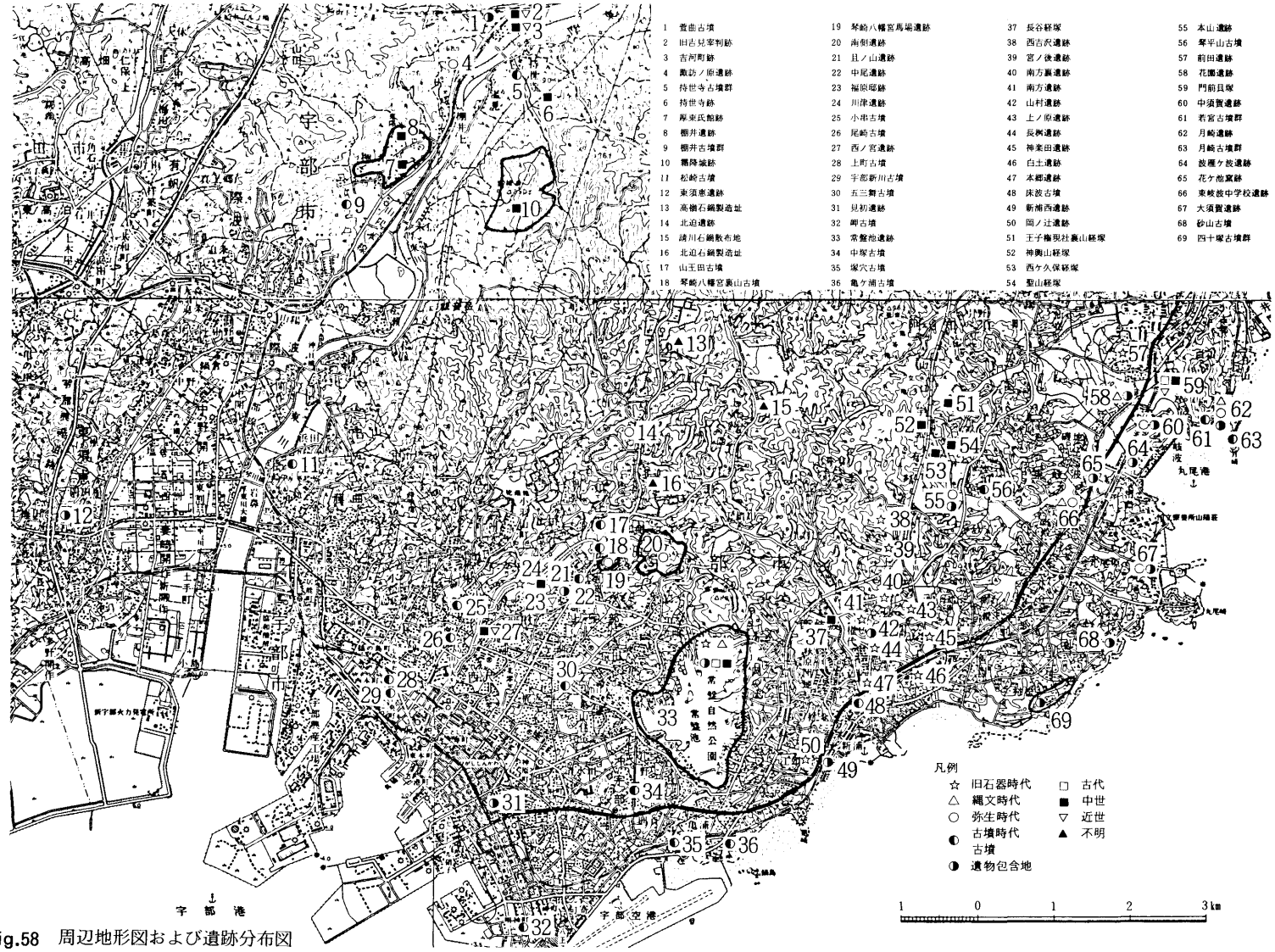


Fig.58 周辺地形図および遺跡分布図

や中部真締川上流域の旦ノ山古墳（21）、山王田古墳（17）等の円墳がそれである。後期末の埋葬跡は東部の砂山古墳（68）、厚東川中流域の棚井古墳群（９）等が知られている。なお、工学部キャンパスの南西約200ｍには後期の五三舞古墳（30）が所在したとされている。しかし、宇部市域に点在する後期の群集墳は、各地で認められるように決して爆発的な増大を示さず、膨張というよりはむしろ制約された可耕地に裏打ちされた新たな可耕地を追求した結果としてのひとつの拡張として把握される。

生産跡には花ケ池窯跡（65）があり、７世紀前半に盛行した須恵器登り窯が確認されている。また、波雁ケ浜遺跡（64）は砂堆地に営まれた後期の製塩遺跡で、美濃ケ浜式土器や製塩遺構が検出されており、県下の製塩遺跡の基準資料となっている。

また、同遺跡からは高坏や埦のミニチュア土器、土製の勾玉、小玉、スプーンや滑石製模造品が出土しており、製塩に付随する祭祀を示唆する。東須恵遺跡（12）からは剣形の滑石製模造品10点が出土しているが詳細は不明である。

くだって大化の改新後は、律令制国家の成立にともない、宇部市域は国郡制に基づく地方行政組織の一単位として長門国厚狭郡[9]に編入され、律令制下における政治、経済、社会機構として中央に掌握された。生産の場においても例外ではなく、国家的土地所有を背景とする農業生産基盤として条里制が施工された。宇部市域では厚東川下流域、河口付近および東部の低台地上に「一ノ坪」、「中ノ坪」等の坪名が散見されるが、いずれも遺存地名、文献資料に依拠するもので条里地形の復原にいたっていない。

しかし、公地公民制を基盤とする律令国家政治体制は、人口増加と田地の荒廃のもたらす口分田の不足に伴う解決手段として制定された墾田永世私有法により寺社、貴族の大土地所有を惹起し、経済的側面から瓦解をはじめる。こうした中央集権体制の崩壊による治安の混乱は身分秩序の変革をもたらし、厚狭郡内においても私的徴税単位として分割された厚狭郡東部の厚東部の納税責任者として厚東氏を登場させ、平安後期以後厚東氏は武士として成長する。

在地領主化した厚東氏は霜降城[10]（10）を構築する一方、恒石八幡宮、古尾八幡宮、川津寺、安養寺、持世寺等を建立した。このような仏教保護のもと、仏教信仰が浸透する中で、末法思想は社会現象のあらわれとして長谷経塚（37）、神輿山経塚（52）、聖山経塚（54）、等として具現化する。

源平争乱後、長門国において有力武士として頭角を現わした厚東氏は鎌倉時代には御家人として幕府を支え領国支配を行なっていた。厚東氏の館は厚東川下流域の棚井付近に所

在したとされ、付近の山麓からは直属家臣をまつる五輪塔が多数出土している。

しかし、南北朝の内乱期に至って周防国に盤踞する大内氏に屈し、現在の宇部市域は大内氏の知行下に入るようになる。そして、大内氏、くだって毛利氏の所領下で現在の宇部市域は山陽道の要所として位置づけられたのである。

（河　村）

3　層位

工学部前身の宇部工業専門学校設立時およびそれ以後の造成、環境整備等によってキャンパスの立地する洪積台地は、北から南へ階段状に少なくとも４段の削平を受けている。本調査区はその上位から３段目のテラス上に位置し、現地表は北から南へやや傾斜しつつもほぼ平坦に引きならされている。

地山面にいたる層順は単純で腐蝕土および構造時等の置土を含む第１層：表土直下に地山である第２層：黄橙色粘土が観察される。（Fig.60）。第２層上面では既設建築部材（コンクリート基礎）が見出された。第１層の堆積層はTR６を除いて平均30～40㎝であるが、TR６においては最大厚60㎝である。また、それ以下の土層の堆積状態をTR１からTR３各北端において可能な限り観察すると、第２層以下はTR１およびTR２東端にのみ見られる第３層：淡黄橙色粘土、TR１からTR３にかけて東から西へ漸次堆積厚を増しTR３では最大厚１ｍとなる第４層：黄灰橙色粘土と続き、蛇紋岩岩盤である青黄灰色土へと移行する。なお、第５層についてはその堆積厚は不明である。

（河　村）

4　遺物（Fig.59，１・２）

二点あるが、いずれも表土（置土）内からの出土で、二次的に包含されていたものである。

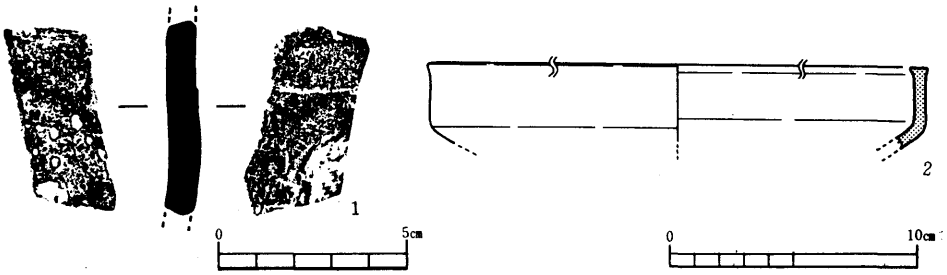


Fig.59　出土遺物

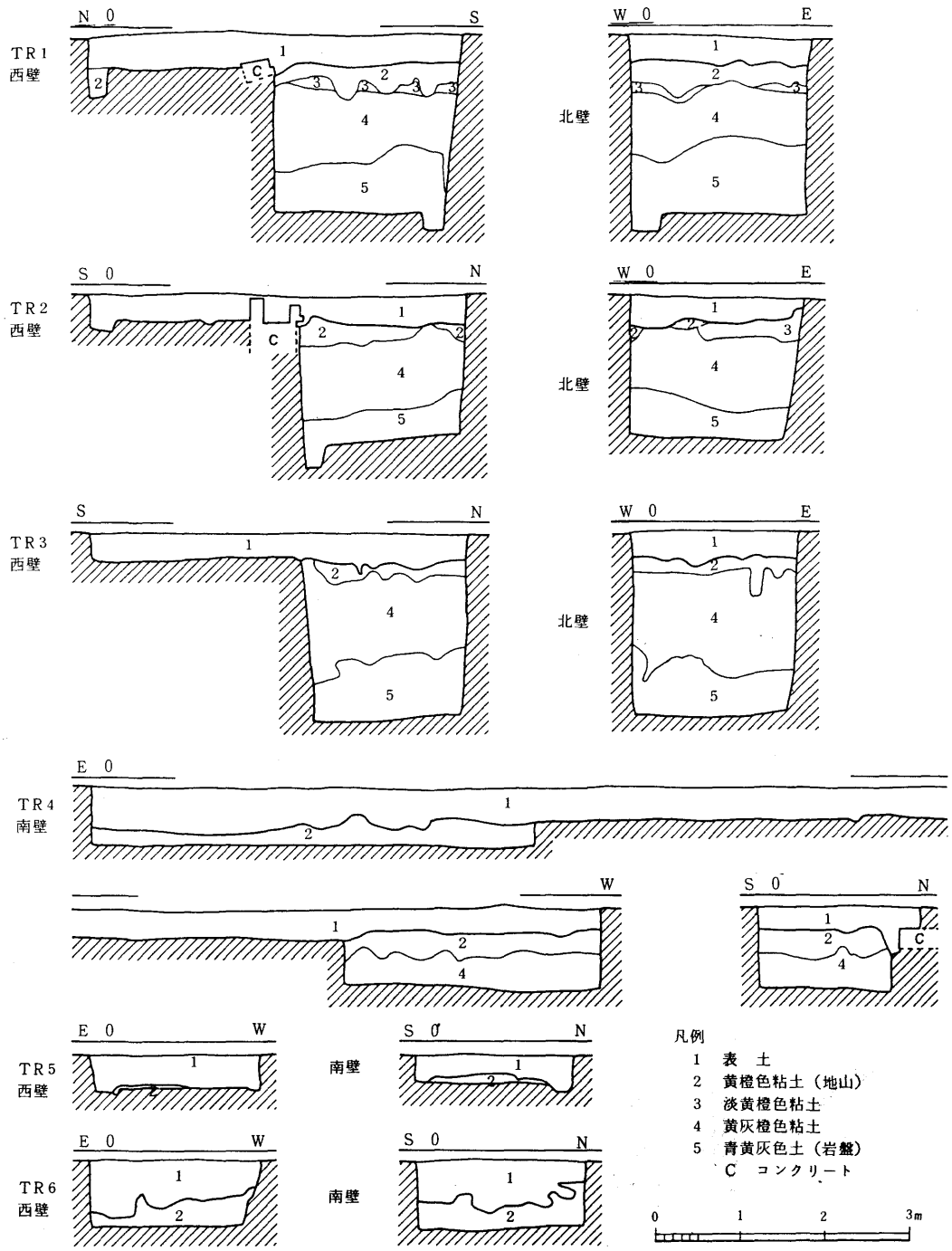

TR1
西壁
北壁
TR2
西壁
北壁
TR3
西壁
北壁
TR4
南壁
TR5
西壁
南壁
TR6
西壁
南壁
凡例
1 表 土
2 黄橙色粘土（地山）
3 淡黄橙色粘土
4 黄灰橙色粘土
5 青黄灰色土（岩盤）
C コンクリート
0 1 2 3m

Fig.60 土層断面図

小　　結

1は須恵器。破片のため器種は不明である。色調は内外面とも青灰色を呈し、胎土は精緻。内面には焼きぶくれがみられる。2は磁器の鉢と思われる。体部は稜をなして「く」の字形に屈曲する。口縁部はほぼ直立し口縁端部は平坦な面をなし内外へやや拡張する。胎土は灰黄色で黄褐色の釉を施す。

（福　島）

5　小結

今回の調査では顕著な遺構、遺物は確認されなかった。当地区では地山はすべて現地表下40～60cmの表土直下に見出され、宇部工業専門学校当時の建築基礎が埋存することから、当地区周辺が後世に大規模な削平を受けたことを窺わせる。しかし、表土中からではあったが須恵器、磁器等の遺物が出土したことは看過できない。周辺地域においても常盤池遺跡をはじめとして大小路、山門等本キャンパスと同一段丘上に立地する各遺跡から須恵器、土師器が採集されており、本キャンパス内でも第6章で述べる比較的後世の削平規模の小さな地域を中心に遺跡の埋存が予想される。従ってキャンパス内における旧地形およびその残存状況の把握と併行して今回の出土遺物の流入経路・要因について今後分布調査を含めた詳細な調査が必要である。

（河　村）

〔注〕

1）山口大学三十年史編集委員会『山口大学三十年史』（山口大学、1982年）。

2）宇部市史編纂委員会『宇部市史　自然環境・民俗方言篇』（1966年）。
小野忠熙「第四紀の宇部の海岸地形」（『宇部の遺跡』、宇部市教育委員会、1968年）。
高橋英太郎・河野通弘・長尾　恵・大浜迪郎「宇部地域の洪積層」（『山口大学教育学部研究論叢』第7巻第2号、1978年）。

3）宇部市史編纂委員会　『宇部市史　資料篇』（1966年）。

4）注2)に同じ。

5）近年、宇部台地における旧石器時代の研究は、遺跡立地のあり方を含めて山口県旧石器文化研究会により精力的に進められている。
山口県旧石器文化研究会「宇部台地における旧石器時代遺跡（1）－遺跡群の概要－」（『古代文化』第35巻12号、1983年）。
山口県旧石器文化研究会「宇部台地における旧石器時代遺跡（2）－長桝遺跡第1点　その（1）－」（『古代文化』第36巻第7号、1984年）。

6）以下、特に明記しないかぎり各遺跡の概要については下記の資料に依る。
宇部市教育委員会　『宇部の遺跡』（1968年）。
宇部市史編纂委員会　『宇部市史　資料篇』（1966年）。
宇部市史編纂委員会　『宇部市史　通史篇』（1966年）。
山口県教育委員会　『山口県文化財概要』　第4集　（1961年）。
宇部市教育委員会　『宇部市遺跡地図』
山口県教育委員会　『山口県遺跡地図』（1972年）。

7）宝暦10年（1760）作成の福原家旧蔵古銭壷箱書添文に

一、半両　秦始皇鋳之
　　實暦十辰歳迄二千六年ニ成ル

一、五銖　前漢武帝鋳之元狩五年
　　實暦十迄千八百七十八年成ル

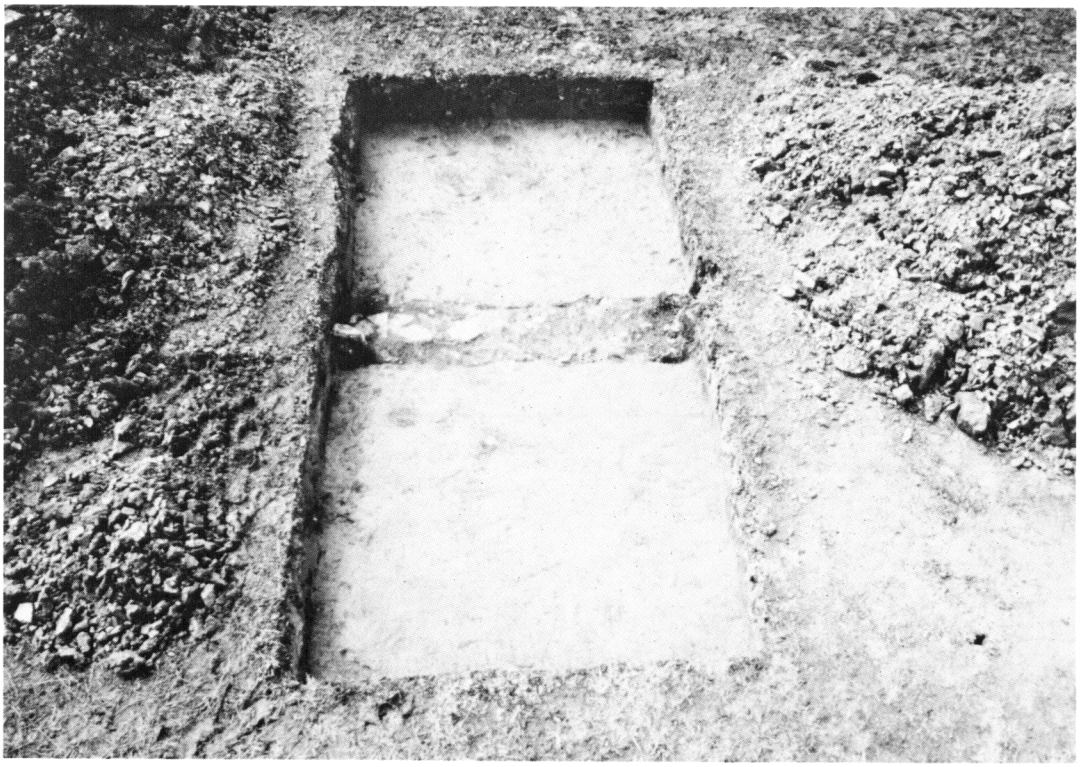
右元文五年庚申正月領分宇部

小串村澳ノ山松濱中ヨリ
嶋村ノ百姓市左衛門ト云者掘
出而
元貞公獻之

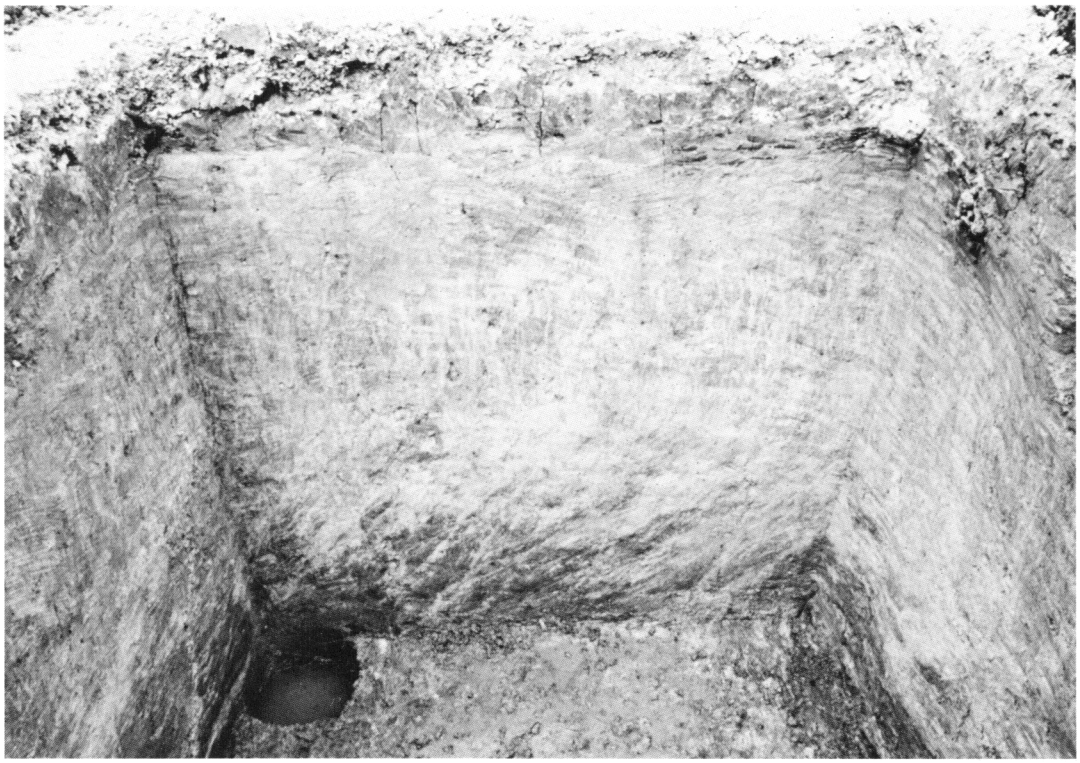
とあり、元文５年（1740）島村の百姓市左衛門の手によって沖ノ山浜松の砂中より掘り出されたという。
現在は宇部市立図書館付設資料館に収蔵されている。
佐伯敬紀・中村博之　「沖ノ山浜松出土の土器および古銭」（『宇部の遺跡』、宇部市教育委員会、1968年）。

8）小田富士雄「山口県沖ノ山発見の漢代銅銭内蔵土器」（『古文化談叢』第９集、1982年）。
9）厚狭郡の名は長門国天平九年（737）正税帳や続日本紀神護景雲三年（769）三月の条にみえる。
10）浄名寺所蔵の家譜・恒石八幡宮旧蔵の系図および妙青寺本の系図によると七代武光による築城とある。

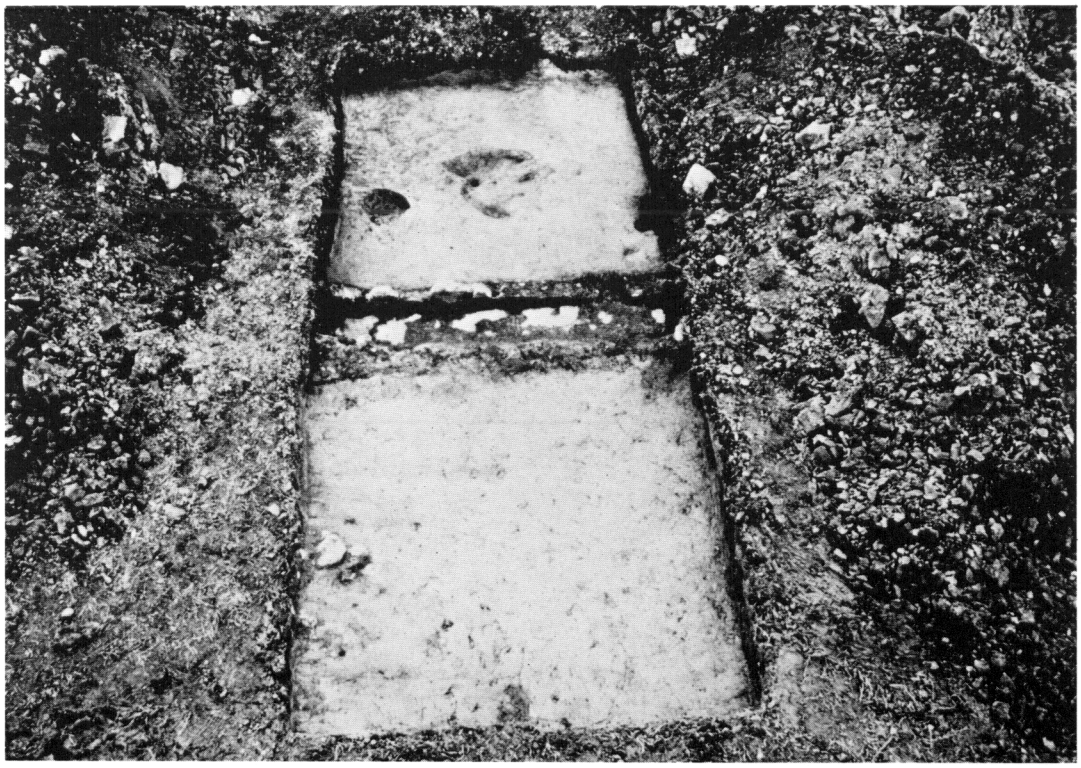
(1) 調査区全景（北から）



(2) TR1 全景（北から）



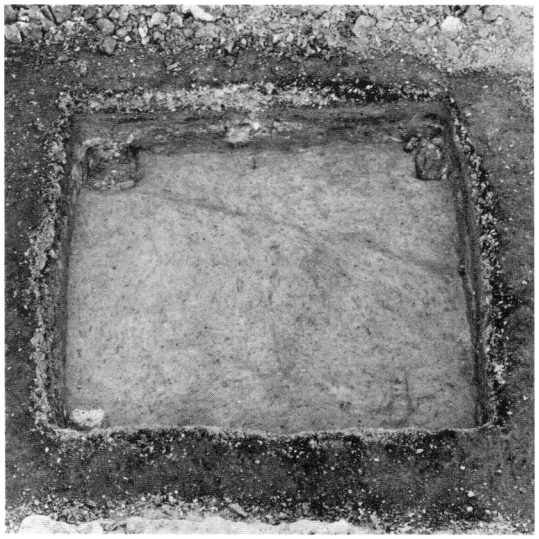
(1)　TR 1 北壁土層断面（南から）



(2)　TR 2 全景（北から）

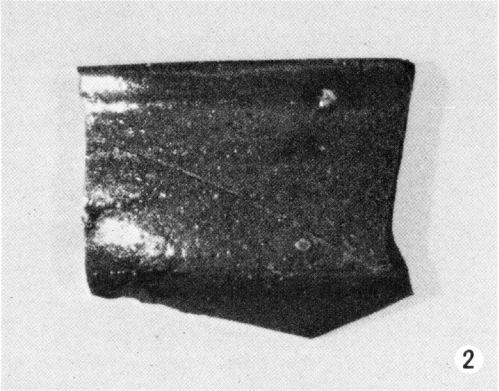
(1) TR 3 全景（北から）

(2) TR 4 全景（西から）



(1)　TR5 全景（北から）

(2)　TR6 全景（北から）



(3)　出土遺物（1. 須恵器，2. 磁器）